

ラファエロ・コード? 『アテナイの学堂』と ベッサリオン vs ゲオルギオス=トラペズンティオス論争

Raffael Code? "The School of Athens" and Bessarion vs Georgios
Trapezuntios on Plato and Aristotle

三嶋輝夫
Teruo MISHIMA

本稿の目的は、ヴァチカンの「署名の間」に描かれたラファエロの『アテナイの学堂』(Scuola d'Atene、1509-10)の中央を占めるプラトン、アリストテレス両哲学者の特徴的な図像に込められた意味合いを、枢機卿ベッサリオン(ca.1403-1472)とゲオルギオス=トラペズンティオス(1400/5-1472)の間に交わされた論争を手がかりとして探ることにある。

最初に先ず、そもそも何故に思想史的背景が問題となるのかについて説明することとした。

[序] 図像の中のプラトンとアリストテレス

周知のごとく、この有名な絵は(図版1参照)、ヴァチカンの「署名の間」の四つの壁に描かれた四枚の絵の中でも最も有名なものであるが、Mostによれば、近年の研究の比重は、かつて解釈者たちが熱中した画中の人物像の同定作業 — 例えばこの壁際に描かれた緑色の服を着た人物はソクラテスである、といった — から、これら四枚の絵相互の間の関連の解明に移りつつあるとされる¹。しかし以下の論考においては、あくまでも「アテナイの学堂」に焦点を絞って論じることとする。

実は熱心な同定の試みにもかかわらず、少数の例外を除いて、大多数の解釈者の意見が一致している人物の数は少数にとどまるとされる。Mostは1883年にAnton Springerによつ

¹ Most, G.W., Raffael, *Die Schule von Athen*, Fischer, 1999, p.23ff.

なお残りの三枚とは、『聖体の論議』『バルナツソス』『枢要徳』の三つである。図版1は、同書に付された写真による。

て作成されたその一覽を掲載しているが²、そうした数少ない異論の無い例の代表が、絵画の中央を占める二人の人物の図像、すなわちプラトンとアリストテレスの図像である。何故、この二人については異論がないかと言えば、それは二人が小脇に抱えている書物 — 実際は二人が生きていた時代の書物はパピュロスで出来た巻物であったと考えられることからすれば、これもまた背後のローマ風アーチと並ぶアナクロニズムであるが — の背表紙に刻まれた書名が、それぞれの代表的著作のそれであることに因る。そしてそれが『ティマイオス』と『ニコマコス倫理学』であることは、これまた有名な二人のポーズの対照に対応していると考えられてきた。一般に流布している教科書の見解に従えば、左手に『ティマイオス』を抱え、右手の人差し指を垂直に伸ばして上方を指さしているプラトンのポーズは超感性的なイデア界ないしは彼岸の重要性を示唆し、他方、水平に前方を指さしているアリストテレスのそれは感性的かつ経験的な世界ないしは此岸の重要性を示唆しているとされるのが常である。

しかしこの両者の哲学的世界観の相違についてのいわば定説化した解釈についてもまた、一たび、15世紀にその口火が切られた論争、すなわちプラトンとアリストテレスのどちらの思想がキリスト教の教義に近いか>をめぐる熾烈な論争に目を向ける時には、はたしてそれが当時すでに「定説」と言えるほど確定したものであったかどうかについて、重大な疑問が生じざるを得ないのである。

その論争の経緯について、Hallは彼女が編纂した論文集の序文で次のように紹介している。

「過去の世代においてもプラトンとアリストテレスの合致 (concord) というテーマは幾度か表面に現れたが、それはこのフレスコ画 (『アテナイの学堂』を指す) のテーマとして、ある種の権威を以て浮上し始めた。Eugenio Garinはラファエルが絵を描いていた当時も『哲学の平和』(pax philosophica)が激しい論争のテーマであり、決して解決済みの問題ではなかったことを指摘することによって、この件についてもっとも包括的な表現を与えた。彼は1486年にピコ・デラ・ミランドラが行った試み、すなわち人類の精神的平和のために、学者たちの集まりに対してあらゆる哲学とあらゆる信仰の合致を証明しようとする試みを我々に思い起こさせた。

マルシリオ・フィチーノはプラトン主義とキリスト教神学の宥和を企てたが、しかしフィチーノのプラトン神学の理念は一般的に受け入れられるには程遠かった。アリストテレスの弁護者とプラトンの弁護者の間で論争が荒れ狂い、決して過去のものとはなっていないと、とGarinは述べている。」³

そしてこの激しい論争の火付け役となったのが、ベッサリオンの師でもあるプレトーンの

² Ibid., p.14f., Abb.2 (図版2)

³ Hall, M., *Raphael's School of Athens*, Cambridge 1997, p.35f.

書であった。

「ビザンティンの学者プレトーンが神学者としてプラトンを検討することを提案したとき、彼はゲオルギオス・トラペズンティオスの激怒を誘発した（1458年の『プラトンとアリストテレス、両哲学者の比較』“*Comparationes Philosophorum Platonis et Aristotelis*”）。トラペズンティオスはこうした提案のすべてを、ローマ教会とその哲学 - アリストテレスとアルベルトゥス・マグヌスとトマス・アキナスに基づく哲学 - に対して加えられたトルコ人の手先による破壊的かつ煽動的な攻撃とみなしたのである。」⁴

ここで登場するのが、プレトーンのかつての弟子ベッサリオンである。

「1469年に枢機卿ベッサリオンのトラペズンティオスに対する強力かつ雄弁な応答のラテン語版（『プラトン批判者に対する論駁』“*In Calumniatorem Platonis*”）が出版され、多くの読者を得た。

この論争はラファエロが『アテナイの学堂』を描く直前の数十年の間にピークに達しはしたが、1523年にトラペズンティオスの反プラトン主義者のマニフェストがヴェニスで再版されたことが物語るように、論争の火が消えていなかったことは確かである。さらにはラファエロがその部屋（署名の間）に絵を描いていたのとはほぼ同時に、著名な哲学者の甥であるジャン・フランシスコ・ピコは、キリスト教神学と異教の哲学の宥和不可能性 - それはまさに『アテナイの学堂』に現れているものの正反対のものである - を証明するのに懸命になっていたのである。」⁵

そこで先ず、この論争の火付け役となったプレトーン（1355/60-1450/2）のアリストテレス批判について、その概要を一瞥することとしたい。

【一】 プレトーンのアリストテレス批判

『アリストテレスとプラトンの見解の相違について』（*De differentiis Aristotelis et Platonis*, 1439.）

との題名を持つプレトーンの論考は、次のように始まっている。

「ギリシャ人の中でもローマ人の中でも、我々よりも昔の人たちは、プラトンをアリストテレスよりも遙かに高く評価していた。ところが今の人間たち、とりわけ西欧の人間の多くの者たちは - 自分たちが先の人たちよりも賢くなったと思い込んで - プラトンよりもアリストテレスに感嘆している。彼らは、アリストテレスが自然に関する何か完璧な知識

4 Ibid., p.36. なお、彼女はゲオルギオス・トラペズンティオスの著者名を略しているが、ここではフル・タイトルに改めてある。

5 Ibid.

を達成したと称しているアラブ人のアペロエスとかいう者に従っているのである。

仮に他の点では真面目な男だとしても、魂についての説に関して魂が死すべきものであるとするほど軽薄な男に対しては、そのように安易に真面目だと言うことは私にはできない。

実際、そのような無知に気づいていないような人間が、一体、どのような重大な事柄の然るべき判定者となることが出来るというのだろうか。そしてそれらの点についてはアリストテレスもまた自分の無知に気づいていないように見える。が、我々は真実を語るべきであって、その男（アリストテレス）を讒訴すべきではない。たとえその男が、彼以前の人間たちの大多数の者を讒訴していたとしても。いや、この私には、讒訴する者を讒訴し返すことも決して罪のないことではないように思われる。

しかし現在においてもプラトンにむしろ票を投じる人々がいることからすれば、我々はその人々を歓迎しつつ、先の者たちについても、彼らがあまりにも好戦的でなければ、その過ちを正しながら両者が見解を異にする点について簡潔に述べ、一方（アリストテレス）が他方（プラトン）よりも劣っていることを示すことにする。長々とした論争的な議論を繰り返すのではなく、出来るだけ簡潔に論証するように努めながら。』⁶

このようなきわめて挑発的な書き出しに続けて、プレトンはアリストテレスの説と彼が見なすものをプラトンの所説と対比しながら逐一論駁していくのであるが、その中でも特にゲオルギオス・トラベズンティオスとベッサリオンの間の論争と思想的関連性が高いと思われる主な争点だけを抜き出して簡条書きにすれば、以下のとおりである。

(1) プラトンは「万物の王たる神」を観知的かつ離在的な実在（イデアを指すと思われる）ならびにこの宇宙全体の「製作者」（δημιουργός）としたのに対し、アリストテレスは神は何の製作者でもなく、ただ単に「この宇宙を動かすもの」（οὐρανοῦ τοῦδε κινητικόν）に過ぎないとしている。

(2) アリストテレスが一方で「個別的なもの」（τὰ καθ' ἕκαστα）を「第一の最も勝義の実体」（οὐσῖαι πρῶται καὶ κυριώταται）とし、他方で「種と類」（τὰ εἶδη τε καὶ γένη）を「二次的で劣った実体」（δεύτεραι τε οὐσῖαι κακείνων μείους）とすることによって、「端的に普遍的なもの」（τὸ ἀπλῶς καθόλου）を「部分的なもの」（τὸ κατὰ μέρος）よりも下位に置いていることは、その同様の無知を物語る。

(3) プラトン派の者たちは、「思惟されたものから思惟されたものへと」（ἀπὸ νοήματος ἐπὶ νόημα）動かされることの故に（万有の）魂の実体と能力と活動を区別し、他方、人間の魂については、「思惟すること」（τὸ νοεῖν）から「思惟しないこと」（τὸ μὴ νοεῖν）へと、あるいは「思惟しないこと」から「思惟すること」へと動かされることに基づいて、常にあるいは

⁶ テキストは Plethon, *De differentiis* (Περὶ ὧν Ἀριστοτέλης πρὸς Πλάτωνα διαφέρεται), ed. B. Lagarde, *Byzantion* 43(1973):321-343 による。

全面的な活動状態において「存在についての認識」(ἡ ὄντων γνῶσις)を持つのではなく、潜在的に持つに過ぎないと判断しているのに対して、アリストテレスは魂は動かないと主張している。このことをアリストテレスが場所に限定して主張するなら正しいが、端的に一切の運動に関して主張するのであれば不十分である。

(4) 魂についての著作および形而上学についての論考から把握されるように、アリストテレスが人間の理性(νοῦς)は不滅で永遠的としていながら、倫理に関する論考のどこにおいてもその主張を用いていないのは、非難に値する。その説は倫理に関する論考と徳に関する理論にとって最大の寄与をなすべきものであるにもかかわらず。

それよりも遙かに悪いのは、この人生が終わったあとには善いことは何一つないと考えていることである。

(5) 徳論において徳は「中庸」(μεσότης)であり、悪徳は「極端」(ἀκρότης)であるとしているが、雷や地震を恐れないことを悪徳としている例からも分かるように、アリストテレスは「恐れるに足らないもの」(τὰ θαρραλέα)と「恐れるべきもの」(τὰ δεινά)を大小・多寡といった「量」(πόσον)のみによって区別しているに過ぎない。これに対してプラトン派の者たちは他の点でも思慮において勝っているが、その大小・多寡に拘わらず、「醜いもの」(αἰσχρόν)はすべて「恐れるべきもの」であり、「醜くないもの」は「恐れるにたらないもの」としている。すなわち「どれだけ」(量)によってではなく、「どのような性質のものか」(ποιόν)を判断の基準としているのである。

(6) その究極目的についての説も、非難に値する。というのも他のすべての良識ある人のように「立派さ」(τὸ καλόν)を「最高善」(τάγαθόν)とするのではなく、「観照に関する快樂」(ἡ θεωρητικὴ ἡδονή)をそれであるとしているが、もし観照に関する限りにおいて快樂は善であるとすれば、「観照」(το θεωρεῖν)が端的に「最高善」であることになろうし、逆に「観照」が「快樂」を伴う限りにおいて善であるとするならば、今度はまた「快樂」が「最高善」であることになるだろうからである。

(7) アリストテレスはイデア論(ὁ περὶ εἰδῶν λόγος)についてもまた異論を唱えているが、その一方は言いがかり(τὰ μὲν συκοφαντοῦντα)であり、他方は空振りに終わっている(τὰ δὲ οὐδὲν περαίνοντα)。

先ず、プラトンを念頭に置いて、ソクラテス以後の人間がイデア論を創始したと言っているが、ロクロスのティマイオスの書物から知られるように、プラトン以前にもピュタゴラス派の人々がこの見解をとっていたのは明らかである。というのも、ティマイオスはこの宇宙を「イデア的なコスモスの知性的範型の似像」(νοητοῦ παραδείματος τοῦ ἰδανικοῦ κόσμου εἴκονα)として理解しているからである。

次にイデア論者がイデアは感覚の対象に対して「同名同義的」(συνώνυμα)ではなく「同名異義的」(ὁμώνυμα)であるとしているのに対して、アリストテレスが「同名同義的」とし

ているのも不当である。彼は「長期にわたる白さも一日限りの白さに少しも劣ることなく同名同義的であるがゆえに、一方のものは永続的であり、他方のものは可減的なものであるからといって同名異義的であるということにはならない」としているが、アイデアを立てた人たちはそれらは感覚の対象に「同名異義的」であるとしているのである。すなわち、彼らは「知的なもの」(τὰ νοητά)が「先の感覚の対象の範型」(παραδείγματα εικόνων τῶν αἰσθητῶν)であると想定しているのである。リュサンドロスの像がリュサンドロス本人に、またヘラクレスの像がヘラクレス本人に同名同義であるとみなすのでもない限り、いったいどうして人は似像が範型に同名同義的であるとみなすことが出来るのだろうか。

以上のごとく、プレトーンはプラトンに対するアリストテレスの批判が的外れなものであることを強調し、プラトンを称揚する。その批判には例えば(5)のアリストテレスの徳論、特に勇気理解に対する反論に見られるように、必ずしもフェアとは言えない面もあるのであるが、まさにこれとは逆にプラトンをこきおろし、アリストテレスを絶賛しているのが、次に見るゲオルギオス・トラペズンティオスなのである。その批判は、プレトーンのそれよりも広汎かつ徹底的であるとともに、些か品位に欠ける - 率直に言ってあげつない - もんではあるが、ベッサリオンの反論を理解する上で不可欠の前提を成すので、以下、その概要を把握しておくこととしたい。

【二】ゲオルギオス・トラペズンティオス『プラトン、アリストテレス両哲学者の比較』におけるプラトン批判

ゲオルギオスの著作が全体としてどのような内容のものかを概観するのに最も簡便な方法は、その目次を通覧することである。そこで以下、些か長くなるが、その目次を訳出することとしたい⁷。

(便宜上、原著にはない番号を付すことにする。)

第一巻：何が以下の事実の理由なのか

(1) 或る者たちは言葉(verba)を探求して事柄(rēs)は探求せず、別の或る者たちはその逆であり、また或る者たちは弁論の正しい組み立て(oratiōnis concinnitās)のみに喜びを覚え、別の或る者たちはその両方、すなわち事柄と言葉の両方、またそれら両者の構成(compositio)に喜びを覚えるということ。

⁷ テキストは Georgios Trapezuntios, *Comparationes Philosophorum Aristotelis et Platonis*, Minerva, 1965(repr.)による。

(2) プラトンとプラトン派の者たちは皆、言葉（による表現）と構成の妙のみによって幅を利かせていたが、事柄（の理解）には全く欠けている。これに対してアリストテレスは、その両方と作品の分類において偉大であること。

(3) さらにアリストテレスは、「弁論術」においても (in dicendi artibus)、プラトンよりも優れているということ。

(4) 論証の研究においても (in disserendi studiis)、アリストテレスがその全ての元祖であり、プラトンは無学 (rūdis) であること。

(5) 自然に関する分野においても、アリストテレスが驚くほど傑出していること。

(6) さらに数学に関する分野においても、アリストテレスと比べるならば、プラトンは教養のない人間だと君も言うであろうこと。

(7) 形而上学に関する分野においてもまた、アリストテレスがあらゆる点で勝っていることの。逆にプラトンは、その知識から遙か遠くに追放されていること。

(8) アリストテレスの少なからぬ著作が散逸していることについて。三つのアルファベットによって、三つの探求、すなわち自然に関する探求、形而上学に関する探求、道徳に関する探求が概括される。

(9) アリストテレスが道徳哲学においても、プラトンより遙かに学識があること。

(10) 簡単な枚挙。教えることに関するプラトンの混乱について。

第二巻：

(1) アリストテレスはカトリックの真理に合致し、プラトンは合致するところがきわめて少ないことが本巻において論証されること。

(2) 救いにとって不可欠な事柄においてのみ、教会の師父たちを信じないことが不敬虔なのであり、それ以外の事柄においては、たとえ彼らと反対の考えを持つとしても何ら関係ないこと。

(3) この第二巻の分割。プラトンは実際には (rē) 多くの神々を崇めていながら、言葉の上では (verbis) 神は一人であると言っているが、アリストテレスは唯一にして第一の原理にすべてのものを端的に還元し、他の神々と同列に置くこともしていない。

翻訳者 (traductor) の義務について。神の全能について。プラトンとアリストテレスの神学について。

(4) アリストテレスは唯一の神が三重でもあることを多少なりとも理解していた。そして神の痕跡 (vestigia dei) が被造物に刻印されていることも、またそれらの痕跡に基づいて、我々が信じている事柄もまたある程度理解されることも。

(5) 物体 (corpora) が物体である限りにおいて、物体に刻印された唯一にして三重の神の痕跡について。

(6) 物体に刻印された最高存在者についての痕跡を、アリストテレスがそれに相応しく用いていること。

(7) 神について語るとき、アリストテレスはある時は複数を、ある時は単数を用いているが、万物を完成する者としてである。すなわち、究極の存在を三重性において想定しているとするならば。

(8) 真理への愛によって、この仕事は著者によって担われたこと。少なからぬ言葉の力について。

(9) 世界の創造についてアリストテレスはどう感じていたか。

(10) アリストテレスによれば、世界は神の本性にでもなく、あるいは部分のように全体に依存するのでもなく、神の意欲に依存するのである。

(11) その想定に基づいて、アリストテレスは世界は神の自由な意志に依存すると考えている。

(12) プラトンは詩的に、またイメージを介して魂について、また魂の不死について語っているが、アリストテレスは論証している。

(13) アリストテレスは魂の本性について、包括的に説明している。

(14) 能動的な原理と受動的な原理は、魂においても物体においてと同様である。

(15) 魂について、また知性の個体化と合成についてのアリストテレスの見解から帰結する事柄について。

(16) アリストテレスの見解による魂の起源について。

(17) 摂理と運命について

(18) 人間に関わることの保持に必要な全ては神の霊によって被造物に与えられるものと、聖書の筆記者同様、アリストテレスは見なした。

(19) あらゆる異教の錯誤とギリシャ人たちの災いは、プラトンの著作から生じた。その反対に、アリストテレスの著作からは、ラテン人たちはこの上もなく助けられた。

(20) 涙の原因と、その効用について。

(21) アリストテレスが真の救いを追求した可能性は高い。

第三巻：両者の生活について。目次は以下の通り。

(1) 一方に対する賞賛と他方の愚かさについて、本巻において論述される。そして彼らの著作から彼等の生活が吟味されなければならない。

(2) 『パイドロス』と『饗宴』において書かれていることに依拠しつつ、プラトンの犯罪について

(3) プラトンの魂は妻女の公有化から明白に示されるということ。

(4) 処女性と断食が快樂に最も対立するという。そして快樂は自己陶冶されていない

魂を永遠の拷問へと引きずっていくか、永遠の享楽へと導くということ。

(5) アリストテレスの生活は、両者の著作から知られるように、プラトンのそれに根底的に対立するものであること。

(6) 四人のギリシャの救済者に対する、プラトンの嫉妬と悪口について。

(7) 傲慢さと軽薄さから、プラトンは自分が人間以上の存在であると称している。

(8) アレクサンダー大王について。神は人間たちに聖典を受け入れる準備をさせるために、彼とアリストテレスの両者を遣わされたということ。また何故にギリシャ人はあるいはその悪徳によって、あるいは美德によって全ての民族の中で最も際立っているのか、また二人の人物について、いかなる仕方では輝いているのか。

(9) プラトンは自分の法律によって、若者たちを節制へと促しているが、それは転じて贅沢へとかりたてるためであるということ。

(10) プラトンは自分の法律によって、国家が永続的になることを夢見た。そし公私にわたる諸制度を定めた。

(11) 神の霊を受けて、プラトンによって次のことが言われた。最善の国制は単純なものであり、またそれはヴェネチア人にもみふさわしい。

(12) 『法律』の第十巻でプラトンが魂について書いていること。

(13) プラトンが自然本姓故に、男には行動する力を、女には受容する力をあてがっていること。

(14) プラトンの著作と規則 (praecepta) と制度がギリシャを滅ぼしたということ。

(15) もし前もって注意しないならば、西欧もまた同様に滅びるであろうこと。

(16) プラトンはアリストテレスとはなく、エピクロスとモハメットと一致していること。

(17) マホメットについて。マホメットがプラトンよりも遙かに狡猾であること。

(18) キリスト教徒たちの怠惰についての脱線。

(19) ゲミストス (・プレトーン) について。もし抵抗しないならば、最初は小規模だがそれから大規模な災いが続くであろうこと。マホメット自身の事績が実例を持ってあきらかにしているように。

(20) 感謝したいと欲する全ての人間に対する、アリストテレス賞賛への呼びかけと著作家アリストテレスの功績に対する感謝の念の表明。

以上が、目次であるが、この目次を通観しただけでも、その内容は一目瞭然と言えよう。それはアリストテレスをこの上もなく学識に富むとともに人間的にも優れた人物として絶賛するとともに、その立場をキリスト教の教義にも近いものと認定する一方で、プラトンについては知的にも道徳的にも遙かに劣るだけでなく、モハメットと並んで西欧キリスト教

世界を脅かす脅威として徹底的にこきおろすものである。しかしベッサリオンが皮肉を込めて言及する事実、すなわち他ならぬゲオルギオスがプラトンの『法律』をラテン語訳し、その訳書をヴェネチア共和国に理想国建設の最善のテキストとして売り込もうとしたというエピソードを思い起こすとき⁸、ベッサリオンならずともゲオルギオスの人格と知的誠実性に疑問を感じざるを得ないのであるが、その論拠の妥当性の検討については、ベッサリオンその人の論駁を見ることにしよう。

〔三〕ベッサリオン『プラトン批判者論駁』におけるゲオルギオス批判

ベッサリオンはその反駁の書の冒頭で、彼がゲオルギオスのプラトン批判の書 — と言っても、実はその実名を挙げることは慎重に避けているのであるが — に触れた経緯について次のように述べている。

「プラトンとアリストテレスの比較と称する或る書物が我々の手に入った。そこで直ちに我々はその発見物に大喜びして、まるで狼が何か獲物についてするような仕方で、手の中にあるものそっちのけでその書物を読むことに熱中したのであった。というのも、我々はその書の中に、各々の哲学者の自然に関する事柄 (τὰ φυσικά) についての、あるいは自然を超える事柄 (τὰ ὑπερφύη) についての、あるいは論理に関する事柄 (τὰ λογικά) や倫理に関する事柄 (τὰ ἠθικά) についての見解の提示と相互の比較を、見いだすものと期待したからであった。

すなわち、いかなる点でこれとこれとは一致し、いかなる点でこれとこれとは異なるのか、またいかなる議論によってその一致点と相違点は示されるのか、また第一実体と第二実体のいずれが優先するのか、アリストテレスにとって質料と形相は何を意味しているのか、またプラトンにとって大と小は何を意味しているのか、またいかなる仕方で完全現実態 (ἐντελέχεια) は魂に於けるその自動性に合致するのか、またある種の形相 (εἶδη) は離れて有る (χωριστά) のか、それとも全く離れてはいない (ἀχώριστά) ものなのか、さらにもしも離れて有るのならば、自体的に存在するのか、それとも純粋な思考だけの内に存在するのかといった点について。」(Vol.I-1-1)

この引用部分に続けてベッサリオンはさらに存在の意味や分割法、世界の恒存性や神の位置づけ、徳や人生の究極目標などについてのアポリアを列挙し、それに対する答えをこの書物の中に見いだせるものと大きな望みを抱いていたことを強調する。が遺憾ながら、その期待は読み始めてまもなく、失望に変わる。

「以上のような理由から、我々は発見物に大喜びしてそれを読むことに夢中になったので

⁸ Cf. Mohler, L., *Kardinal Bessarion*, Scientia Verlag Aalen, 1967 (repr. of 1st edition of 1927) Bd.II, vol. IV-17-1. 以下、ベッサリオンからの引用は同書による。

あるが、実際、読み始めて直ちに誹謗中傷の悪臭漂う敵意に満ちた言説に出くわすことになるとは一体誰が思うだろうか。それでも議論の先の方になれば、我々が期待していたものに出会えるだろうと期待していたのであった。ところが全ての議論を読み終えたとき、宝の山と思ったものは石炭のくずであり、期待していたものはどこにも無かったのである。」(Vol. I-1-2)

期待が大きかっただけに、その失望も大きかったわけであるが、それでもベッサリオンはくさることなく、ゲオルギオスの主張、すなわちそのプラトン批判がいかに筋違いなものであるかを丹念に論証することに取りかかるのである。ただここで注意すべきは、ベッサリオンはゲオルギオスのプラトン批判については徹底的に論駁するものの、そのアリストテレスに対する評価については必ずしも全面的に否定してはいないということである。ベッサリオン自身、アリストテレスの『形而上学』をラテン語に翻訳しており、アリストテレスについては非常に高く評価している。従って、彼自身の立場は、プレトーンのようにアリストテレスを批判して一方的にプラトンを賞賛するものなれば、逆にゲオルギオスのようにプラトンを批判してアリストテレスを絶賛するのでもなく、両者の偉大さを評価しつつ、その共通点を見いだそうとする、いわゆる<折衷主義的>な立場と見ることができよう⁹。ただし『アテナイの学堂』の解釈とも関連するキリスト教の教義との関係で言えば、ベッサリオンの基本的立場は以下のようにまとめることが出来るであろう。

すなわち、プラトンもアリストテレスも飽くまでもギリシャ人であって異教徒であるが、しかしどちらの方がよりキリスト教に近いかと言えば、プラトンである、と。

そこで以下、ベッサリオンによる多岐にわたる論駁の中でも、特にキリスト教の教義に関係の深い、三位一体をめぐる議論を簡単に紹介することとした。

言うまでもなく三位一体の教義はキリスト教の核心に関わる問題であり、ビザンツ帝国に迫り来るトルコの脅威を目の前に、イタリアのフェラーラとフィレンツェで慌ただしく開かれた二度にわたる東西両教会の統一を巡る会議においても、それは東西両教会のみならず東方教会代表の間においても激しい争点となったとされる¹⁰。この会議においてベッサリオン自身は一貫して西側に与する立場をとったのであるが、本書においてベッサリオンはアリストテレスの見解に三位一体が含まれているとのゲオルギオスの主張をナンセンスとして退けた上で、三位一体の教義とプラトンとアリストテレスの見解の関係について次のように評している。

⁹ ラファエロに直接的影響を与えたとされる Egidio da Viterbo (1469-1532) による同様の試みについては、前出 Hall 編の論文集に収められた、Rowland, I.D., *The Intellectual Background of The School of Athens* を参照。

¹⁰ この二つの会議と、その争点ならびにあまりに人間的な争いについては、Mohler, *op.cit.*, Bd. I を参照。

「次に真実を語るとともに聞こうと望む者たちは以下のことを認識しなければならない。

すなわち、プラトンもアリストテレスも、あるいは他のギリシャの宗派の誰一人として、キリスト教徒の子供たちが聖なる説話と神的な啓示から受け取って語り、考えているような仕方で、三位一体について言及した者はいないのだということを。というのも、人間の、論理的思考によって(ἀνθρωπίνῳ λογίσμῳ)彼の真理の高みにまで導かれることは不可能だからである。そうではなく、論証抜きで、ひたすら信仰と神の教えによってのみそれは与えられるのであり、他の仕方では決して与えられないのである。いかにも、師父たちの語るところによれば、他の仕方で信仰の賜物が我々に与えられるのは決して似つかわしくないからである。従って、誰一人としてプラトンやアリストテレスを賛嘆し、賞賛して神的な三位一体を伝え、それに仕える者とは言わないであらう。いかにも、そうした主張は無内容な嘘の作り話にすぎないのである。何故なら、二人ともその真なる見解(ἀληθῆς δόξα)とは無縁であり、二人とも我々の敬虔さの敵だからである。

実際、アリストテレスは如何なるところでも、一度も、些かたりともその見解について語ったことも、思いついたことも無いのである。他方、プラトンは三位一体についていくらかは語っているが、しかしカトリックの信仰が教えるところに比べれば遙かに少ない。というのもプラトンは神格の位階を導入し、存在者の第一の始原(ἀρχή)は、生成したのもでもなければ(ἀγένητον)全く始まりを持つものでもない(πάντῃ ἀναρχον)としているからである。その始原を彼は<一者>(τὸ ἓν)とも<善>(τὰγαθόν)とも呼んでいるのである。それは自分自身によっても他の者によっても作られた者ではなく、全く原因も始まりも持つことなく、あらゆる理性と全存在者の上にあるのである。

次に第一の存在と理性と第一の形相は、第一の神によって一として作られたが、或る点では自己創造的であり、自ら存在する者として存在するとともに理性であって、位階において二番目の本性(φύσις τάξει δεύτερα)を持つ。

場所と価値において第三のものは、万物の魂である。」(Vol.II-5-2)

このようにベッサリオンはゲオルギオスとは違って、ここではプラトン、アリストテレスの双方をカトリックにとっての「敵」とまで言っているのであるが、しかしその論駁の最初で「先ず、その人の(プラトンを指す)あらゆる事についての智恵と教養を、次にその教説が福音と我々の教えに協和していること(下線は筆者)、最後にその人柄の優れていることと振る舞いの公明さと哲学的な生活を、そのことを知らない人々に対して示すことにしよう」(Vol.I-1-1-6)と述べていることからすれば、相対的にはプラトンの方がキリスト教に近いことをアピールしようとしていることは明らかである。

【結び】

以上、我々は簡単ながら、プレトーンによって火が付けられた論争の概略を見てきたのであるが、以上の概観からも明らかになるように、プラトンとアリストテレスのどちらがキリスト教の教義に近いかという問題はラファエロが『アテナイの学堂』を制作している頃(1509～10年)にもまだ未決着であったと考えられる。そのことからすれば、上方を指さしているプラトンが彼岸を志向しているのに対して、前方を指さしているアリストテレスが此岸を志向しているとの「定説」は必ずしも当時において既に自明の前提となっていたとは断定できない可能性が高い。なるほど当時既に、プラトンのイデア論は知られるようになっていたとしても、上に見たように、プラトンの思想を全体として反キリスト教的かつ快樂主義的なものと見なすゲオルギオスの書物が依然版を重ねていたことを思えば、ゲオルギオスの解釈に沿って、プラトンではなくアリストテレスが上方を指さしている絵を描くことも有り得たはずである。それどころか、プラトンは無視して、アリストテレスだけを中央に大きく描くこともできたであろう。そのような状況にもかかわらず、アリストテレスとの対比において、しかも「署名の間」というヴァチカンの核心に位置する場において、我々が現に見るような仕方両者の指さす方向のベクトルの違いを際立たせる絵を描くことによって、— 仮令それがEdigio da Viterboの示唆に基づくものだとしても — 画家ラファエロはベッサリオン — あと一歩で教皇にも手が届きそうになった重要な枢機卿の一人として、他ならぬヴァチカンの中枢で活躍したベッサリオン — のプラトン、アリストテレス両者とキリスト教の関係についての解釈に密かな支持を与えているとは言えないであろうか。

追記：本稿は2010年度、青山学院在外研究成果報告の一部である。この場を借りて、貴重な研究期間を与えて下さった学院に対し、厚く御礼申し上げる。またこの研究に関して有益な助言をいただいたCambridge大学のDavid Sedley教授、Dr. Niketas Siniossoglou、Dr. David Butterfieldの諸氏に対して感謝申し上げます。

【文献表】

テキスト：

Bessarion, *In Calumniatorem Platonis* ed. by Mohler, L., *Kardinal Bessarion*, Bd.2, Scientia, 1967 (repr. of 1927 edition)

Georgios Trapezuntios, *Comparationes Phylsophorum Aristotelis et Platonis*, Minerva, 1965 (repr. of 1523 edition)

Plethon, Georgios Gemistos, *De Differentiis (Aristotelis et Platonis)*, ed. by Lagarde, B., *Byzantion* 43, 1973, pp.321-343.

主要参考文献：

Hall, M. (ed.), *Raphael's School of Athens*, Cambridge, 1997.

Monfasani, J., *A tale of two books;*

Bessarion's *In Calumniatorem Platonis* and George of Trebison's *Comparationes Philosophorum Platonis et Aristotelis* in *Renaissance Studies*, Vol.22, No.1,2008, pp. 1-15.

Most, G., *Raffael "Die Schule von Athen"*, Fischer, 1999.

Reynolds & Wilson, *Scribes & Scholars*, Oxford, 1974 (2nd.)

酒井紀幸・岩田圭一・宮崎文典（編著）『ルネサンス思想の旅』

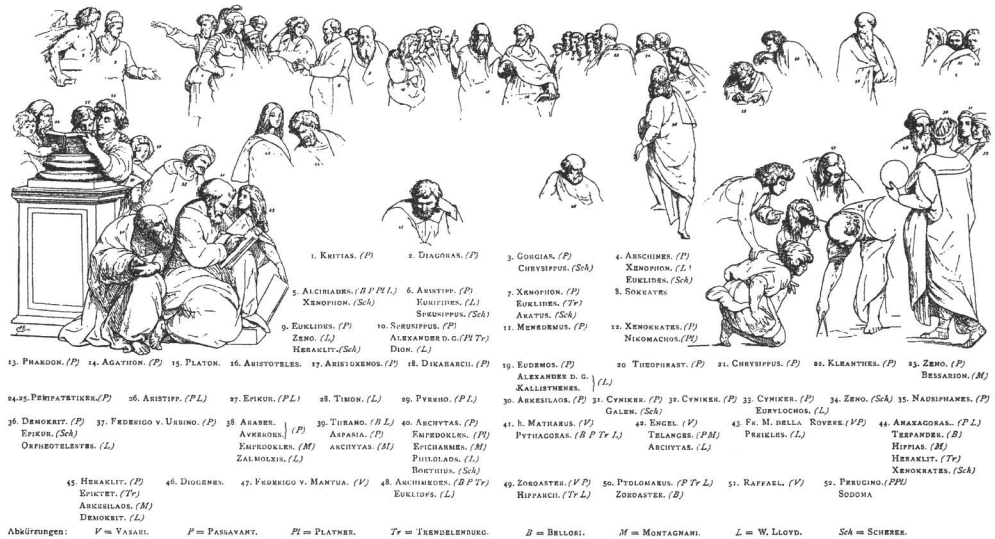
（特に第8章「ベッサリオン」）、早稲田大学、2008年



図版 1

フレスコ 横幅 770cm

ALLER VON DEN BISHERIGEN AUSLEGERN VORGESCHLAGENEN BENENNUNGEN FÜR DIE IN RAFFAELS „SCHULE VON ATHEN“ ERSCHINENDEN FIGUREN.



図版 2